

# 対抗文化認識をめざす社会科の授業設計

—山村生活者の視点から見た現代社会—

Designing a Social Studies Lesson to Facilitate Learners' Sub-cultural Cognition :  
Modern Society from the Viewpoint of Mountain Villagers

中 谷 昇

(奈良県広陵町立真美ヶ丘中学校)

## I. 問題の所在

1968年、国内の木材需要量に占める国産材と外材の比率に逆転現象が生じた。1960年代以降の急激な外材需給率の上昇は、単に外材が安価であるということだけではなく、①住宅着工数の増加にともなう国産材の供給不足、②トータルパフォーマンスを求める住宅産業の構造上の問題、③素材産業としての「川上」と木材産業としての「川下」の協力体制の遅れ、等が要因である。このような外材の拡大は国産材の低迷を招き、国内の林業不振は深刻化している。

農林業以外にこれといった産業に恵まれない山村は、ダム建設や企業の工場誘致、あるいはゴルフ場・ホテル建設といったリゾート化に走り、自らの手で山村の貴重な財産である自然を破壊し、山村固有の伝統文化を観光用の道具にしてきた。このような山村に共通してみられる画一的傾向の背景には、都市・山村間における政治的、経済的な対抗関係が存在する。市場原理が優先する社会が確立する過程で、急激な産業構造の変化に対応しきれなかった山村社会には、さらに都市権力の圧迫によってさまざまな病巣がもたらされている。その典型が「産業廃棄物」である。

「山村崩壊の危機」が叫ばれて久しいが、行政は過疎山村地域を立て直すための手だてを一向に打とうとしない。それどころか、山村振興策と称して必要な大規模林道建設等に多額の資金を拠出するまでに至っている。

また、定数は正によって山村選出の議員数が削減され、もはや「山村の声を国会へ」という役割は果たせなくなっている。

このような行政の姿勢を後押ししてきたのは紛

れもなくメディアである。人工林批判・割り箸バッシングを繰り返してきたマスコミの論調には、いつも「木を伐らないことこそが環境保護である」という考え方が見える。しかし、こういった人間生活を無視した環境保護の考え方こそが、森林を利用することによって成立してきた山村や林業を窮地に追い込んでいる。

以上のことから、このような一面的・固定的な「山村」・「林業」観を払拭するためには、行政が長期的展望を持ち、市場原理、経済効率性、財源のみにとらわれない総合的な山村対策を打ち出すことが求められる。また、山村地域に対する都市住民の理解が求められるとともに、山村自らも内発的發展の方途を模索する必要がある。

そこで、本稿では効率化・グローバル化の進展とともに「支配的文化」が主流となっている現代社会において、時代遅れの産物として切り捨てられている「山村」、「林業」を対抗文化の視点から再評価し、幅広い社会認識形成を図ることをめざす。

また、「森林」を単に多面的機能のみに限定した「環境としての森林」だけでなく、人々の生活との関わりを重視した「経済・環境・文化としての森林」<sup>1)</sup>として総合的に捉え直し、その成果を組み込んだ社会科授業モデルを提案することを目的とする。

## II. 対抗文化の視点

### 1. 社会科教科書に見られる対抗関係

山村問題の本質をとらえるために、「山村」、「林業」と同様、政治的・経済的にマイノリティとして捉えられ、「偏った論理」として位置づけ

られる教科書記述を、小・中学校社会科及び高等学校地歴科地理教科書より抽出し、【表1】の7項目に整理した。<sup>2)</sup>

表1のように、教科書記述には一面的な見方や偏った見方が多く存在し、その傾向として整理し

た7つの論理は、すべて支配的文化からの視線である。また、いずれの論理からもマジョリティ重視・マイノリティ軽視の構造が読み取れる。これらは支配的文化に偏った記述であり、このような見方からは幅広い社会認識形成が生まれにくい。

【表1】社会科教科書に見られる偏った論理

| 対抗関係                       | 偏った論理の内容  |
|----------------------------|---|
| マジョリティ<br>↑<br>↓<br>マイノリティ | <ul style="list-style-type: none"> <li>・人口増加に伴って開拓民は内陸へ向かい、<u>荒野と接する開拓前線（フロンティア）は西へ移動した。</u><br/>(高等学校地理, T社)</li> <li>・ワスプ（WASP）とよばれる白人・アングロサクソン・プロテスタント系の人々は、<u>政治や経済、文化の発展に大きな役割を演じた。</u><br/>(高等学校地理, T社)</li> </ul>                    |
| 先進国<br>↑<br>↓<br>発展途上国     | <ul style="list-style-type: none"> <li>・現代の世界は、アメリカ合衆国、日本、ヨーロッパを極とした<u>三極化の度合いが強まっている。</u><br/>(高等学校地理, T社)</li> <li>・アメリカの豊富な食料の余剰が食料不足に悩む<u>地域への援助を可能にする。</u><br/>(高等学校地理, N社)</li> </ul>   |
| 都市<br>↑<br>↓<br>農山漁村       | <ul style="list-style-type: none"> <li>・かつての閉鎖的で自給的な村落ではなくなり、<u>都市化の影響で近代化された農山漁村になってきている。</u><br/>(中学社会科地理的分野, K社)</li> <li>・日本には人口の集中による過密地域と、<u>人口がまばらで問題をかかえている過疎地域がみられる。</u><br/>(中学校社会科地理的分野, S社)</li> </ul>                          |
| 行政・企業<br>↑<br>↓<br>農山村民    | <ul style="list-style-type: none"> <li>・現在でも<u>地域の開発の引き金として、新幹線や高速道路の建設を求める動きが各地で続いている。</u><br/>(中学社会科地理的分野, K社)</li> <li>・圏央道は、東京郊外の<u>都市の発展のために必要である。</u><br/>(中学社会科地理的分野, K社)</li> </ul>   |
| 開発<br>↑<br>↓<br>環境保全       | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ブラジルでは、アマゾン川流域と首都を結ぶ道路や、大西洋沿岸の大都市を結ぶアマゾン横断道路が<u>建設され、内陸部の開発が進んだ。</u><br/>(高等学校地理, N社)</li> <li>・臨海部を埋め立てたり、内陸部を造成したりして工業用地を広げ、こうして日本は世界の中でも<u>土地利用が高度に進んだ国となった。</u><br/>(中学社会科地理的分野, N社)</li> </ul> |
| 商工業<br>↑<br>↓<br>農林水産業     | <ul style="list-style-type: none"> <li>・とりわけ若者は、就職する機会が少なく、<u>収入も多くを望めない地方をきらい</u>傾向にある。<br/>(中学社会科地理的分野, N社)</li> <li>・農家の数は大はばに減ったが、それでも、<u>残された農地は、新鮮な野菜の供給地として、また、貴重な緑地として人々に安らぎをあたえている。</u><br/>(中学社会科地理的分野, N社)</li> </ul>            |
| 都市的森林観<br>↑<br>↓<br>山村的森林観 | <ul style="list-style-type: none"> <li>・県内の市町村は<u>平地林などで利用価値の低かった台地に工業団地を造成して、工場の誘致を行ってきた。</u><br/>(中学社会科地理的分野, N社)</li> <li>・奥多摩地域は、大半が山林におおわれており、<u>都心部からも近いので、都民にとって、絶好のレクリエーション地域となっている。</u><br/>(中学社会科地理的分野, N社)</li> </ul>            |

## 2. 対抗文化

岩田一彦は、対抗文化認識による知識の科学化をはかるための社会科内容構成のポイントとして対抗文化の理解を取り上げ、「対抗文化の理解が、支配的文化の理解を深め、幅広い社会認識形成と偏らない価値観形成に有効である」と述べている。

岩田は社会を支配している支配的文化に対する概念として「対抗文化」を位置づけ、subcultureという語を充て、「サブカルチャーは、時流に残されてサブカルチャーにとどまっている場合

と、時代を先取りしている場合とがある。」と述べている。

そもそも「対抗文化」という概念は、1960年代のアメリカで高度管理社会に抗して現れたものである。アメリカの「対抗文化」の場合、ベトナム反戦運動、公民権運動などの要素も加わり、親世代のWASPに見られる伝統的な文化や生活様式を否定する形で展開された「ヒッピー」などの一連の運動を指しており、英語では counterculture という語が使用されている。

しかし、「対抗文化」についてはさまざまな定義がなされており、社会学の分野においてもその概念規定は研究者によってまちまちである。

また、文化の分類軸も「上位・高級文化に対する下位文化」、「大衆文化に対する少数者の文化」、「支配的文化に対する対抗文化」といった具合に、その対立関係は重層的・複合的であり、「対抗文化」という概念も使用される文脈と状況により微妙に変化する。

この概念を最初に提起したインガーは、当時混在して使用されていた「下位文化」(counterculture)概念を、以下のように整理している。<sup>4)</sup>

- ① 文化の下に横たわり、文化に先立ち、その変動の範囲に制限を加えるもので、人類学等の分野に用いられる。
- ② ある社会よりも小さな集団の規範的構造を示すために用いられる。代表的なものは「少数民族」である。
- ③ 明らかに失望させるような状況、あるいは、より大きな社会との葛藤から生じる規範に言及するために用いる。

①は主流である文化の独断専行にある種ブレーキをかける役割を果たし、②は「マイノリティとしての数の論理」に楔を打つもので、③は社会の枠組みの違いによる葛藤や拮抗関係を表す。

石飛和彦は、「対抗文化」の視点について、ウィリスとサックスの対抗文化論を展開しながら、次のように述べている。<sup>5)</sup>

『対抗文化』という視点は、そうした『クレイゴト』を否定していこうとするものである。それは、『大人』ないし『全体社会』の文化に鋭く対立する集団の文化＝『対抗文化』を、その内側から描き出し、その『対抗文化』がいかに『大人』、『全体社会』の欺瞞を暴くか、また、結局のところ『大人』、『全体社会』に取り込まれてしまうか、その可能性と限界、そのメカニズムを冷静に辿ろうというものである。」

石飛は『対抗文化』を、全体社会の内側から描き出す」とし、「対抗文化」が「支配的文化」を全面否定するものではないとしている点に着目

したい。

上野圭一は「対抗文化」概念規定をアンチではなく、より可能な代案を提出するという意味から、オルタナティブ(代替)と呼んでいる。上野は「対抗文化」概念を歴史的に確立させたシオドア・ローザックの考え方に依拠するとともに、「対抗文化」の中核に「近代合理主義のもたらした科学的世界観を相対化するシャーマニズム的な世界観の導入」があると述べている。

オルタナティブ(代替)とは、西洋医学の発達の関係上、外刃医療と呼ばれマイナーだった伝統医学・民間療法・栄養にまつわる療法等(古くから連綿と続いている療法)を指し、近年、西洋医学を否定するのではなく、補完する役割として代替医療と呼ばれ、認知され始めたものである。

したがって、筆者が提唱する対抗文化とは「都市中心の使い捨て文化に対する、伝統的な山村文化」といった二項対立によるものではなく、都市・山村という軸にとらわれず、都市・山村内部双方に古くから内在し、かつ受け継がれているものを再評価し、主流文化を補完する役割を示している。

そこで、岩田、インガー、石飛、上野らの「対抗文化」概念をもとに筆者は「対抗文化」を以下の4点に整理した。

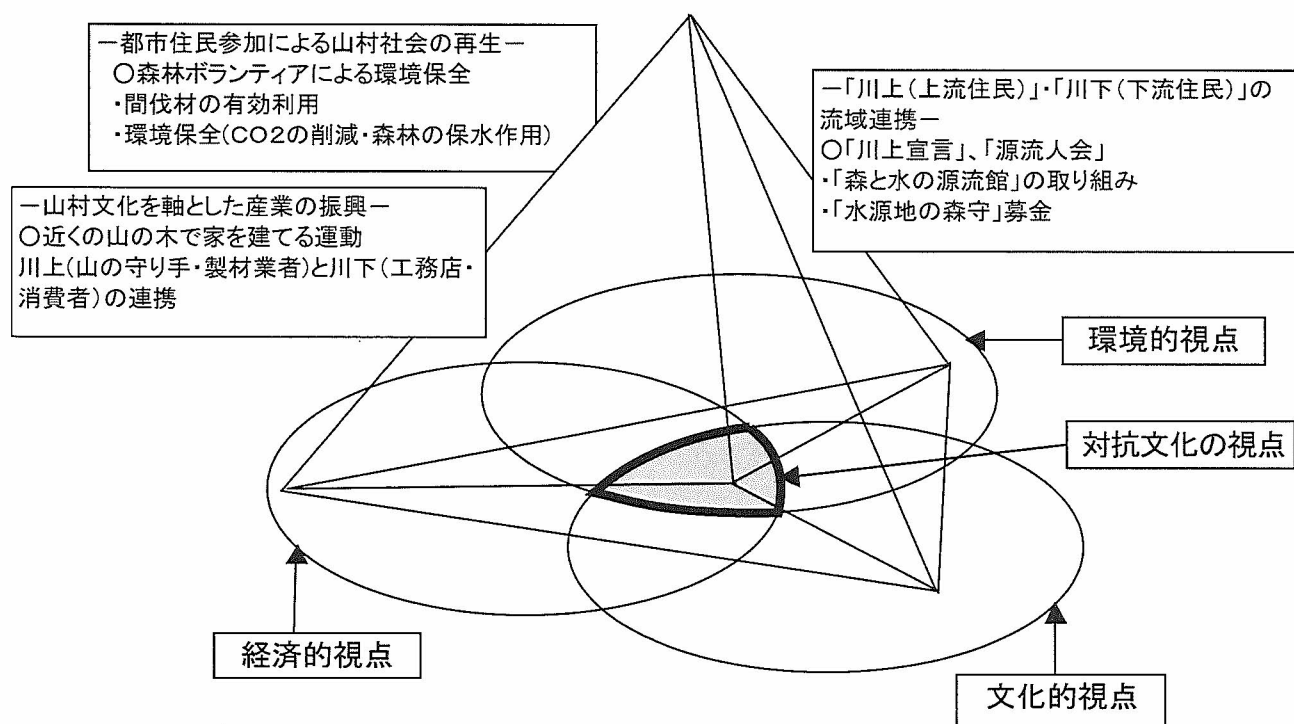
- ① 「対抗文化(サブカルチャー)」は、時流に取り残されてサブカルチャーにとどまっている場合と、時代を先取りしている場合がある。
- ② 「支配的文化」からの一方的な視線を排し、「対抗文化」から「支配的文化」をみることにより、社会の全体構造をより相対的に捉えることができる。
- ③ 「対抗文化」は「支配的文化」の全面否定ではない。
- ④ 「対抗文化」は都市・山村という軸にとらわれず、都市・山村内部双方に古くから内在しているものをさす。

以上のことから、「対抗文化認識」は、効率化・グローバル化の進展とともに「支配的文化」が主流となっている社会において、時代遅れの産物として切り捨てられてはいるものの、文化の画一化

の流れに一線を引き、支配的文化に見られる一面的な見方に陥りがちな文化認識の在り方そのものを見直すものであり、「対抗文化」を絶対視し「支配的文化」を排除するのではなく、「対抗文化」に軸足を置きつつ、「支配的文化」も含めた社会の全体構造を明らかにする思考方法であると定義

づけられる。

筆者は「対抗文化認識」を、天野正子が整理した「生活者概念の系譜」<sup>6)</sup>をもとに、図1の「対抗文化の視点（山村生活者の視点）」として位置づけ、表2の対抗文化の視点を組み込んだ山村の知識構造として整理した。





【表 2】 対抗文化の視点を組み込んだ山村の知識構造

|  |   |  |
|--|---|--|
| ①固定化された環境保護認識都市住民の森林観メディアの偏った報道が山村を混乱に陥れている。                       | ①-1 農林漁業といえは軽視され、環境といえは大事にされる、土台を忘れた浅薄な風潮がある。<br>①-2 山村は都市の予備地であり、生活と森林とのつながりが希薄化した都市民のバッファとして捉えられている。  | ①-1-1 手を付けぬ自然こそ至上として、林業や農業を軽視する自然保護の風潮がある。<br>①-1-2 林業関係者は、「木を伐るな」「林道をつくるな」といった自然保護運動に苦しめられている。<br>①-1-3 「林業」に泥臭いイメージがあるが、[林業]から「森林」へと改名が進んでいる。<br>①-2-1 森林は人々の心を和ませ森林の緑を見ていると目が休まり、気持ちよく過ごせる。<br>①-2-2 農山漁村は、自然をなくした都会人の気晴らしの道具にされている。<br>①-2-3 山村は森林浴やハイキング、キャンプ等といった都市の人々の絶好のレクリエーション地域である。<br>①-2-4 山村と都市との交流は、客として訪れた都市民（森林ボランティア）をもてなすという形態が一般的であり、両者は対等ではない。  |
| ②山村は、森林、農地、河川、住宅等が一体化したこの空間の中で生活、労働、教育、福祉等が相互関係をもち、一つの地域として成立している。 | ②-1 マスコミは、「森林」を映像やイメージといった観念の世界に閉じこめている。<br>②-2 戦後の高度経済成長とともにあらわれた市場経済、国際貿易の拡大は、伝統的な農山村の暮らしの基盤を壊した。<br>②-3 山村にあっては、山村では地域の土木事業への依存の割合が高い。                         | ②-1-1 マスコミは、「スギ、ヒノキは伐けない、広葉樹ならよい。ブナは神聖」というイメージを人々に植え付けている。<br>②-1-2 花粉症の蔓延が、マスコミによる杉・檜などの人工林批判へとつながっている。<br>②-1-3 捨てるような木を有効利用している割り箸が森林破壊の元凶であるという世論をつくりあげている。<br>②-2-1 伝統的な農林家的な暮らしをしていたのでは、子どもを進学させることもできない時代が、高度経済成長期に作り出された。<br>②-2-2 貨幣主導型経済の浸透により、現金を得られる場所を求めて山村から都市へ人口の移動が始まった。<br>②-2-3 山村では、過剰化をくい止めるため、町民住宅、村民住宅を作り、新たな住民を呼び入れようとしている。   |
| ③森林に対する政策や事業は都市民の理解や要望に沿った形でしか展開しない。                               | ③-1 行政効率の低下や地域社会としての成立が難しくなっている山村は、経済的な面からの存在価値がないとみなされ、国から切り捨てられようとしている。<br>③-2 日本の政策は、総合的な農山村政策の中で林業を考慮するという視点をもっていない。<br>③-3 富のある下流の民の飲み水や産業開発のために、上流が破壊されている。 | ③-1-1 かつて山村はエネルギー供給基地だったが、エネルギー革命により、新炭生産の盛んだった山村は就業と収入の機会を急速に失った。<br>③-1-2 山村では、一般的に、林業や農業のほかに、これといった産業にもめぐるまれておらず、はたらく場所が限られている。<br>③-1-3 多額の累積赤字を抱えながらも国有林経営を続けるのは、すでに山仕事は山村の失業対策事業と化しているからである。<br>③-1-4 林業のために支出されるべき林道建設費が、山村の土木事業者を支えている。<br>③-2-1 農林業に魅力を感じないし、農山村には楽しみがないという若者が多い。<br>③-2-2 人口の減少は、地域に学校を卒業した人の就職先が少なかったり、よりよい仕事を求めたりして都市に出ていくことから始まる。<br>③-2-3 農山村から若者が出て行くのは、嫁が来ないことも原因である。  |
| ④産業効率主義が優先する日本の社会で、山村は切り捨てられようとしている。                               | ④-1 地域の林業不振の原因は、木材を加工・販売する川下の林産業・住宅産業にある。<br>④-2 上流の森林や棚田により日本の土壌は守られ、下流域の暮らしを安定させてきた。  | ④-1-1 山村の声は世論にも政治にも届かなくなり、政治家もマスコミも相手にしない。<br>④-1-2 小学校社会科教科書からの「林業」記述の削除は、金にならない林業など教える必要がないという山村切り捨ての政治姿勢である。<br>④-1-3 政府が推進している市町村合併の促進は中心都市の利益を優先させることになり、過疎地域の行政サービスをより低下させ、過疎化に拍車をかける。<br>④-2-1 山村の人々にとっては、森、川、用水路、水田、畑、田舎の労働・生活圏であるが、省庁それぞれの権限を勝手に分割し合い、統一した政策はまったく提示しえない。<br>④-2-2 新幹線や空港の整備及び大都市間の道路網の整備が優先され、山村の道路網等の整備は遅れている。<br>④-2-3 政府は国民共通の財産である国有林を、一部の開発業者や赤字解消を先延ばしするための「生け簀」にしている。  |
| ⑤基盤産業である農林業の衰退が、農山村社会に影響を落とし、国土保全や環境保全にもマイナスの影響を与えている。             | ⑤-1 地域の林業不振の原因は、木材を加工・販売する川下の林産業・住宅産業にある。<br>⑤-2 上流の森林や棚田により日本の土壌は守られ、下流域の暮らしを安定させてきた。  | ⑤-1-1 タム建設は都市民、企業等のための事業であり、水没地域住民のための事業ではない。<br>⑤-1-2 ダムは、山村を犠牲にし自然の仕組みを変え、巨費を投じ年月をかけて築く巨大施設であり、ゆくゆくは使えなくなる消耗品である。<br>⑤-1-3 都市で生まれた大量の産業廃棄物も、都市での処理能力を超え、山間部に放置されている。<br>⑤-2-1 日本の伝統的な民家は都市化の波によって次々と取り壊され、新建材を使用した国産不明の建物に取り替えられている。<br>⑤-2-2 外材の優位性は、その均質な品質が住宅産業のトータルパフォーマンスによく合致したためである。<br>⑤-2-3 安価な外材の輸入によって、木材産業の構造的な硬直性が原因で木材価格は低下し、国内の林業は衰退した。   |
| ⑥日本文化の源流は「ブナ林文化」「照葉樹林文化」に端を発しており、日本固有の文化形態は森林に大きく依存した山村文化である。      | ⑥-1 山村で今、景観を最も破壊しているのは、都市民を対象とした施設であり、都市民を意識した施設の整備であるをぶちこわす代表格である。<br>⑥-2 山村に残されている文化は、地域の風土を基盤とした伝承文化である。   | ⑥-1-1 農地の拡大や人口増加・住宅や都市建設が森林減少の原因である。<br>⑥-1-2 森林が毎年の魚を使って漁業を助け、漁業が肥料として農業を助け、その農業が森林を助けている。<br>⑥-1-3 伐採した山は保水能力が低下して土が雨によって流出してしまい、都市洪水の原因となる。<br>⑥-2-1 観光地として客を呼べる農山漁村は、活性化のために第一産業を見限り、企業・ゴルフ場の誘致、リゾート地の開発に走る。<br>⑥-2-2 ゴルフ場、スキー場、別荘地等、日本の観光地・リゾート地を形成する景観は、日本らしさをぶちこわす代表格である。<br>⑥-2-3 森林を守るはずである林道が、現実には森林に悪影響を与える観光道路として建設されている。<br>⑥-3-1 山村社会は産業・生活様式の変化によって、山村文化を支えてきた生活文化を失いつつある。<br>⑥-3-2 山村の伝統文化は、村おこしと称する「観光の道具」と化している。<br>⑥-3-3 山村には、今でも森林を荒らさないで利用し続けようとする入会の思想が存在している。 |

### Ⅲ.「対抗文化認識」の育成をめざした社会科授業モデル

#### 1. 題材について

川上村は、日本三大人工美林の1つである吉野杉の主産地である。育成林業の先駆的業績が早くから認められ、明治期には吉野式密植法を体系化した土倉庄三郎のもとに、全国から林業関係者が視察に訪れている。その後林業は飛躍的に発展するものの、高度経済成長期の外材輸入を契機に現在に至るまで、林業不振が続いている。村当局は山村の生き残り策としてダム建設計画を約束し、大迫ダムは完成、大滝ダムは完成間近である。

ダム建設は川上村に莫大な補助金をもたらし、村営ホテル・文化ホール・スポーツレクリエーション施設・遊漁場・木材加工関連施設などの建設に充てられた。バブル経済の波に乗って、これら既存施設の稼働率はきわめて高く、一時期は活況を呈したものの、現在、深刻な不景気が山村に暗い陰を落としている。一方、補助金と引き替えに山村の貴重な自然は破壊され、杉の人工林は削り取られコンクリートの擁壁へ、清流・吉野川はどす黒いダム湖へ、という具合に景観は一変した。今や不釣り合いな「コンクリート」と「鉄」という人工的な建造物によって、かつての川上村の素晴らしい景観は消えつつある。

このような状況にあって、零細林業家たちが設立した「川上さぶり」による川上産吉野杉販売の取組は、苦境にある川上村の山の守り手に勇気を与えている。また、村当局は独自に人工林や原生林の保全につとめ、環境保全の先進的な取り組みをすすめている。さらに、高齢化がすすむ状況を村のマイナスイメージとしてとらえるのではなく、発想を転換して「健康」に着目しプラスイメージで捉え、それを発信する取組にも着手し始めている。

安易なりゾート化から脱却しつつ、山の守り手としてあくまで林業にこだわり続ける姿勢は今も健在である。林業後継者を育成し、木材流通の硬直性を打破して木材の直接販売に乗り出している「川上さぶり」を村当局も支援し、「近くの山の木で家を建てる運動」のブームも重なり、「木の価値」、「木の文化」が見直され始めている。川上村

が進めている「経済」・「環境」・「文化」的視点に立った山村活性化の取組は、全国過疎山村地域への刺激となる一方、今後の山村・林業のあり方を考える上で参考になる。

#### 2. 授業モデル

(1) 単元名 「地域の規模に応じた調査—身近な地域『川上村』(中学校社会科地理的分野)」

(2) 単元の計画(全12時間)

〔概念探究過程Ⅰ〕川上村林業のあゆみと課題

〔概念探究過程Ⅱ〕川上村の観光事業と過疎化

〔概念探究過程Ⅲ〕林業を軸とした山村対策

〔価値分析過程Ⅰ〕川上村(山村)の未来の姿

(3) 対抗文化の視点を組み込んだ山村の知識構造

価値分析過程では、前項の表2「対抗文化の視点を組み込んだ山村の知識構造」をもとに、以下の6つのパターンから山村を考える論争問題を作成した。(紙幅の関係上、②・③・⑤・⑥は割愛した)

|                                       |    |        |
|---------------------------------------|----|--------|
| ① 山村生活者の森林観                           | ←→ | 都市的森林観 |
| 川上村の森林保全は、大部分を森林ボランティアに委ねるべきである。      |    |        |
| ② 農山漁村                                | ←→ | 都市     |
| 都市に住むより、川上村のような過疎地に住む方が不幸である。         |    |        |
| ③ 農林水産業                               | ←→ | 商工業    |
| 川上村は3つめのダム(入之波ダム)の建設計画を進めるべきである。      |    |        |
| ④ 市民(農山村民)                            | ←→ | 行政、企業  |
| 川上村に山幸彦ハウス(川上村住宅供給公社)を作るべきである。        |    |        |
| ⑤ 環境保全                                | ←→ | 開発     |
| 川上村に森守ミュージアム(川上村自然博物館)を作るべきである。       |    |        |
| ⑥ 山村文化                                | ←→ | 都市的文化  |
| 川上村は森林文化、山村文化の継承者養成のために林業学校を設立すべきである。 |    |        |

また、対抗文化の視点を認識している人々(山村・都市に居住し、「山村生活者の視点」に立つ人々)を軸に、山村・都市住民双方の歩み寄りをめざしている。これら6つの論争問題はいずれの論題も、外部不経済として切り捨てられてきた山村問題を考える格好の題材である。

### 3. 指導過程

| 段階       | 主な発問・指示  | 目標及び予想される発言・思考   | 資料              |
|----------|--|--|-----------------|
|          | <p>【概念的知識】 山村に残されている文化は、地域の風土を基盤とした伝統文化（山村文化）である。山村社会は、産業・生活様式の変化によって、過疎と高齢化に加え林業衰退にさらされその結果、山村文化を支えてきた生活文化を失い、都市化の波に呑み込まれている。</p>   |  |                 |
| 情報の収集Ⅰ   | ○「川上村」についてイメージしてみよう。   | 大迫ダム、大滝ダム、吉野杉、吉野川、土倉庄三郎、大台ヶ原、アユ、朝拝式、かみせ祭り、修験道、林隙集落、土場集落等   | ○川上村のイメージ       |
| 情報の分類Ⅰ   | ○「川上村」ってどんな村だろう。   | ・林業の村 ・大台ヶ原の近くにある村 ・大滝ダムのできる村<br>・吉野川(紀ノ川)上流の村 ・後南朝ゆかりの村 ・静かで落ち着いた村  | ○吉野川流域概要図       |
| 学習問題の発見Ⅰ | <p>なぜ、川上村は日本有数の林業地帯（吉野杉の主産地）になったのだろう。</p>  |  |                 |
| 仮説の設定Ⅰ   | ○理由を予想し、仮説を設定しよう。  | ・気候や土壌に関係があるのではないかな。<br>・林業経営・技術に関係があるのではないかな。   | ○川上村の土地利用図      |
| 検証Ⅰ-1    | ○なぜ、川上村は、日本三大人工美林と呼ばれる吉野杉の主産地なのだろう。  | ・川上村は、紀伊半島の南部、奈良県の南東部の山間地に位置している。<br>・川上村は地形が急峻で耕地に乏しく、村の大部分は森林に覆われ、集落は林業を中心にしてつくられている。  | ○林隙集落、土場集落断面図   |
| 検証Ⅰ-2    | ○なぜ、吉野林業方式が日本の林産地のモデルにされたのだろう。   | ・川上村は、わが国有数の多雨地帯であり、豊かな森林環境を育んでいる。<br>・川上村の林業の発達は、寺院や都の造宮と関係が深い。<br>・川上村の林業経営は借地林業制度と山守制度によって支えられてきた。<br>・川上産吉野杉のブランドは、長年にわたる林業技術者の研究と、すぐれた技術体系に支えられて成立した。<br>・川上村は林道から離れた奥地の伐採地が多く、木材搬出費用がかさむため、コスト削減のために集材・運材の効率化に取り組んできた。 | ○吉野川流域の年降水量の分布  |
| まとめⅠ     | <p>川上村は総面積の約95%が森林におおわれ、秋田杉、木曽檜とならぶ日本三大人工美林の1つに数えられる吉野杉の主産地である。川上村の大部分は秩父古生層であり、豊かな降水量と温和な気候という杉の生育における好条件を満たしている。また、密植と除間伐を組み合わせた吉野式密植法、借地林業および山守制度といった技術・経営体系の総体である吉野林業方式にも支えられてきた。その結果、他産地の杉と比べて、美しい淡紅色で香りがよく、無節完満の優良な吉野杉を生産している。</p> |  |                 |
| 情報の収集Ⅱ   | ・このグラフを見て、気づいたことを発表しよう。  | ・1970頃から林業労働者が激減している。<br>・1970頃から労働者人口が激減している。<br>・他の林業地も労働者が減少しているのではないかな。  | ○林業労働者の年齢別構成    |
| 情報の分類Ⅱ   | <p>なぜ、川上村は日本有数の林業地帯（吉野杉の主産地）になったのだろう。</p>  |  |                 |
| 仮説の設定Ⅱ   | ○なぜ、吉野杉の価格が低下し、川上村の林業が不振に陥っているのだろう。  | ・安価な外材の輸入があるから。 ・杉材の品質に問題があるから。<br>・木材搬出費用や流通コストがかかりすぎるから。<br>・長引く林業不振や不安定な就労形態等によって林業が若年層から敬遠され、林業労働者が減少している。   | ○労働賃金の推移        |
| 検証Ⅱ-1    | ○なぜ、川上村では過疎化、少子高齢化がすすむ村の活力が著しく低下しているのだろう。  | ・安価な外材の圧迫や他産地との競合により、国産材の価格が低下し、採算が取れない山の本は伐採されず、森林が荒れている。<br>・川上村では、若年層の流出が多く、高齢化率が高くなっている。<br>・川上村は林業不振、ダム建設による村外への移転にともない山村社会の機能が低下し、過疎化、少子高齢化がすすんでいる。  | ○杉の値段と流通経路      |
| 検証Ⅱ-2    | <p>川上村では、木材産業の構造的な硬直性の問題、安価な外材輸入にともなう国産材の需要低迷、トータルパフォーマンスを求める住宅産業の姿勢等により、基幹産業である林業の不振が深刻化、長期化している。その結果、ダム建設による居住地の移転と相まって、急速に若年層の村外への流出が続き、少子高齢化を招いている。また、このような状況が村の活力を著しく低下させ、山村社会の維持を困難にしている。</p>                                      |  |                 |
| まとめⅡ     | <p>川上村では、木材産業の構造的な硬直性の問題、安価な外材輸入にともなう国産材の需要低迷、トータルパフォーマンスを求める住宅産業の姿勢等により、基幹産業である林業の不振が深刻化、長期化している。その結果、ダム建設による居住地の移転と相まって、急速に若年層の村外への流出が続き、少子高齢化を招いている。また、このような状況が村の活力を著しく低下させ、山村社会の維持を困難にしている。</p>                                      |  |                 |
| 情報収集・分類Ⅱ | ・川上村で取り組んでいる事業をあげよう。   | ・林業振興事業 ・文化財保護事業 ・教育振興事業 ・社会福祉事業・<br>・ダム周辺整備事業 ・スポーツレクリエーション振興事業   | ○山の不思議な言い伝え     |
| 学習問題の発見Ⅱ | <p>どのようにして、川上村は林業を軸とした村の活性化に取り組んでいるのか。</p>   |  |                 |
| 仮説の設定Ⅱ   | ○なぜ、川上村の人々は山村文化を掘り起こし、都市住民に木の文化の重要性を訴えているのだろう。   | ・川上村は、生業としての林業や山村生活に欠かせない「森林」「水」を敬い、大切にしようという心がけから、伝統的に「山の神」「水の神」信仰が行われている。<br>・川上村の人々は、自然としての森林を利用し、「森林」や「木」を生活の中で活かす方法やしぐみを開発してきた。   | ○丹生川上神社上社       |
| 検証Ⅲ-1    | ○なぜ、川上村では、従来の木材流通経路を通さず、吉野杉の直接売ったのだろう。   | ・川上村では、外材輸入にともなう国産材の不振を打開するために、優秀な無垢の木材製品を適切な価格で開発・販売し、販路を拡大している。<br>・川上村では、森林の役割や木材の効能、用途を紹介することにより、川上産吉野杉の良さを広め、木の文化を守る活動に取り組んでいる。   | ○川上さぶりによる吉野材の流れ |
| 検証Ⅲ-2    | <p>○近くの山の木で家をつくる運動宣言</p>   |  |                 |
|          | <p>○木工の里・かわかみ</p>  |  |                 |

|                              |  |   |   |   |  |
|------------------------------|--|---|---|---|--|
| 検証Ⅲ－３                        | ○なぜ、川上村では、吉野川流域で生活している人々と連携を図り、森林を保全する活動を進めているのだろう。  |   |   | ・森林伐採、環境破壊から源流域を守るために、吉野川の源流域の森林を保全する活動をすすめている。<br>・吉野川の上下流の交流、あるいは都市との交流が、水源地の村づくりの一環として欠かせないものとして「川上宣言」という運動を行っている。<br>・川上村では、林業体験・自然観察などの体験活動を支援することにより、森林を守る担い手の生活を守ること、担い手育成が急務であることを、訴えている。 | ○「水源地の森守募金」<br>○全日本そまびと選手権大会<br>○木匠塾<br>○山の学校「達ちゃんクラブ」 |
| まとめⅢ                         | 川上村では、深刻化・長期化している林業不振を打開するために、都市住民と連携して、経済（独自の販売ルートの開拓）・環境（「川上宣言」）・文化（木を生活の一部に利用してきた知恵）的視点に立った総合的な林業活性化策を講じている。  |   |   |   |  |
| 段階                           | 主な発問・指示  | 予想される発言・思考  | 指導上の留意点   | 資料  |  |
| 中核となる問い<br>論題の提示<br>事実の分析的検討 | ①山村生活者の森林観 ↔ 都市的森林観（なぜ、他の産業に比べて「林業」が軽視されているのだろう。）<br>【論題】 川上村（山村）の森林保全は大部分を森林ボランティアに委ねるべきである。  |   |   |   |  |
|                              | ◎森林にはもはや環境的価値しか存在しないのだろうか【①-1】<br><br>◎都市民が森林に足を運ぶのはなぜだろう。【①-2】<br><br>◎山村民と都市民の森林観はどのようにちがいのだろう。【①-3】   | ◎農林漁業といえば軽視され、環境といえはじめて大事にされる、土台を忘れた浅薄な風潮がある。【①-1】<br>○手を付けぬ自然（原生林）こそ至上として、林業や農業を軽視する自然保護の風潮がある。【①-1-7】<br>○林業関係者は、「林業は破壊だ」、「木を伐るな」、「林道はつくるな」といった自然保護運動に苦しめられている。【①-1-4】<br>○「林業」に泥臭いイメージがあるが、林業から「森林」へと改名が進んでいる。【①-1-5】<br>◎山村は都市の予備地であり、生活と森林とのつながりが希薄になってきた都市民バッファーとして捉えられている。【①-2】<br>○森林は人々の心をなごませ、森林の緑を見ていると目が休まり、気持ちよくすごせる。【①-2-7】<br>○山村は自然をなくした都会人の気晴らしの道具にされている。【①-2-4】<br>○山村は森林浴やハイキング、キャンプなどといった都市の人々の絶好のレクリエーション地域である。【①-2-9】<br>○山村と都市との交流は、客として訪れた都市民（森林ボランティア）をもてなすという形態が一般的であり、両者は対等ではない。【①-2-1】<br>○マスコミは、「森林」を映像やイメージとといった観念の世界に閉じこめている。【①-3】<br>○マスコミは、「スギ、ヒノキはいけない、広葉樹ならよろしい。ブナは神聖」というイメージを人々に植え付けている。【①-3-7】<br>○花粉症の蔓延が、マスコミによるスギ・ヒノキなどの人工林批判へとつながっている。【①-3-4】<br>○捨てるような木を有効利用している割り箸が森林破壊の元凶であるという世論をつくりあげている。【①-3-9】 | ◎白神山地の入山問題<br><br>◎森林ボランティア（森づくり政策市民研究会）<br><br>◎割り箸パッシング   |   |  |
| 未来予想                         | 【賛成意見】<br>・林業労働者の高齢化によって、作業能率が大幅に低下している。<br>・山元の立木価格の低下によって、森林の維持・管理が困難になっている。<br>・産業における地位が低下している林業に対して、これ以上補助金を出せない。<br>・自然保護に対する意識が高くなり、森林ボランティアが増加している。<br>・林野庁（行政）の方針が「森林の多面的機能重視」の方向に大きくシフトしている。 |   | 【反対意見】<br>・森林ボランティアは森林管理のプロではなく、森林保全の責任は負えない。<br>・森林ボランティアは都市住民の気晴らしの機会である。<br>・村の基幹産業である林業を放棄すれば、村の残り少ない雇用の場までも失ってしまうことになる。<br>・競争力のない山村からは林業が消え、より一層「川下」優位の体制に傾斜することになる。<br>・山村、林業を切り捨てようとしている行政の思惑通りに事が運ぶ。 |   |  |
| 意志決定                         | 【留保条件】の例<br>・森林ボランティアの活動が、森林の重要性を広める意味合いでの最小限の活動に限定されるなら<br>・行政主導による林業関係の財政削減の意図がないのなら<br>・林業労働者の雇用の大幅削減につながらないのであるならば   |   |   |   |  |
|                              | 川上村の森林保全を森林ボランティアに委ねてもよい   |   |   |   |  |

| 段階                           | 主な発問・指示   | 予想される発言・思考   | 指導上の留意点 | 資料  |
|------------------------------|---|--|---------|---|
| 中核となる問い<br>論題の提示<br>事実的分析的検討 | <p>④ 農林業 ← 商工業      なぜ、国産材を使用した在来工法の住宅が少なくなったのだろう。</p> <p>【論題】 川上村に山幸彦ハウス（川上村住宅供給公社）を作るべきである。</p>   |  |         |   |
|                              | <p>◎山元立木価格と消費者販売価格の差はどうして生まれるのだろうか。</p>   | <p>◎地域の林業不振の原因は、木材を加工・販売する川下の林産業・住宅産業にある。【④-1】</p> <p>◎日本の伝統的な民家は都市化の波によって次々と取り壊され、新建材を使用した国籍不明の建物に取り替えられている。【④-1-7】</p> <p>◎外材の優位性は、その均質な品質が住宅産業のトータルパフォーマンスによく合致したためである。【④-1-1】</p> <p>◎安価な外材の輸入によって、木材産業の構造的な硬直性が原因で木材価格は低下し、国内の林業は衰退した。【④-1-9】</p> |         | <p>◎近くの山の木で家を建てる運動</p> <p>◎杉の値段と流通経路</p> <p>◎「高断熱・高気密住宅」と「エアバスの家」</p> <p>◎無垢材と集成材</p> |
| 未来予測                         | <div style="display: flex; justify-content: space-between;"> <div style="width: 48%;"> <p>【賛成意見】</p> <p>○零細な林業家を支援することによって間伐・植林活動が計画的になされ、地域の森林に手が行き届く</p> <p>○観光立村化に行き詰まりを見せていることから、産業振興につながる。</p> <p>○若者が村外へ流出するのを防ぎ、雇用の場を創出するとともに、少子高齢化に歯止めをかけられる。</p> <p>○無垢の吉野杉を使用した健康住宅（化学物質過敏症やアトピー性皮膚炎などに対応した住宅）が安く手に入る。</p> <p>○都市生活者に根強い自然派志向を喚起し、山村への定住もしくは杉・檜の無垢材による在来工法のへの関心が高まる。</p> <p>○木材産業・住宅産業としての「川下」を独自につくることにより、素材産業としての「川上」との一体化により流通コストの大幅な削減が図られ、産直住宅の低価格が実現できる。</p> <p>○都市化・近代化された生活を見直し、木の文化を守る活動の大切さを再認識できる。</p> </div> <div style="width: 48%;"> <p>【反対意見】</p> <p>○国産材は、クレーム産業といわれる住宅産業の意向に添った均質な品質を実現させられない。</p> <p>○産直住宅の形態であっても、低価格化には限度があり、消費者（施主）のニーズに応えられない。</p> <p>○見通しの暗い林業・木材産業に対して、これ以上投資する必要はない。</p> <p>○3K（汚い・きつい・危険）と言われる林業に若者は魅力を感じない。</p> <p>○林業・木材産業に投資するより、自然を活用した村おこし（定住促進・山村留学・グリーン＝ツーリズム・林業体験・インターネット）をした方が効果が上がる。</p> <p>○すでに大手住宅メーカーが占有している市場に乗り出しても受注が得られるとは考えられないので、このような事業展開は危険である。</p> <p>○林業はやめて、最低限の森林保全活動のみをするだけでよいのではないか。</p> </div> </div> |  |         |   |
|                              | <p style="text-align: center;">↓</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 10px; text-align: center;"> <p>【留保条件】の例</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・外材並みでなくても、ある程度の低価格が実現されるなら</li> <li>・事業資金に対する財政的措置が確約されるなら</li> <li>・山村への定住化を前提条件とした雇用の場の創出なら</li> <li>・林業後継者の育成を企図して行うなら</li> <li>・森林（自然）を利用した観光事業の促進につながるものであるなら</li> </ul> </div> <p style="text-align: center;">↓</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 10px; text-align: center;"> <p>川上村に山幸彦ハウス（川上村住宅供給公社）を作ってもよい</p> </div>   |  |         |   |
| 意志決定                         |   |  |         |   |



#### 4. 授業モデルの成果

##### ① 林政学の内容を組み込んだ授業モデル

本来あるべき林政学研究のあり方を問い直すため、荒廃や林業不振を招いているという現実と直面しながらも、林業を軸とした山村活性化対策に取り組む川上村の事例は格好の素材である。

##### ② 対抗文化の視点を生かした授業設計

教科書における偏った論理を抽出し、対抗関係として整理し、それをもとに「対抗文化の視点」を設定した。この視点に基づいて独自に作成した「対抗文化の視点を組み込んだ山村の知識構造」をもとに価値分析過程を作成し、幅広い社会認識形成と偏りのない価値観形成を図るための授業設計をめざした。

##### ③ 環境問題学習における「森林」・「林業」・「山村」学習との峻別

「森林は守るべきである。どうすれば森林は守れるでしょうか。」という授業は、子どもの思考を停止させてしまう。社会科の授業では、「日本に森林がたくさんあるのに、どうしてその木を伐らないのだろう」という本質的な問題を解いていくことが重要となる。

授業モデルでは、川上村の林業を通して日本の林業構造を把握するとともに、「山の守り手」の役割を認識させることができるよう授業を設計した。

##### ④ 「知識の構造」の明示

「対抗文化の視点」を組み込んだ知識の構造、問いの構造をつくり、それをもとにして授業モデルを構築した。本授業モデルでは、産業・生活様式の変化や都市化の波に洗われ、方向性を失っている山村社会に、地域の風土を基盤とした山村文化の重要性を再認識させることが目的である。

#### IV おわりに

本研究は、林業不振とダム建設によって過疎化がすすみ、山村崩壊の危機にある川上村が経済優先主義のなか、都市の論理によって切り捨てられてきている山村の現状をありのまま子どもたちに伝えたいという筆者の問題意識が出发点である。

したがって、この研究は「林業」の重要性を問い直し、偏った山村イメージを払拭させる役割を担っている。

これまで小・中学校では、都市中心の一面的・固定的な「森林」・「林業」・「山村」観を基底にした授業が行われてきた。その結果として、現在、環境的価値重視に偏重した社会科授業が主流となっている。本研究では、支配的文化のみにとらわれない幅広い社会認識形成と偏らない価値観形成をはかるために、対抗文化の視点を組み込んだ社会科の授業設計をめざした。

#### 【注および参考文献】

- 1) 「経済・環境・文化としての森林」という考え方は明治期の林政学者である本多静六の理論に依拠している。
- 2) 小学校社会科教科書は5社・中学校社会科教科書は7社、高等学校地歴科地理教科書は2社を分析対象とした。
- 3) 岩田一彦『社会科固有の授業理論30の提言』明治図書、2001、pp.59-60
- 4) J.Milton Yinger はアメリカ・ミシガン州生まれの社会学者で、対抗文化（青年問題）運動等の研究者として知られている。
- 5) 石飛和彦『ふたつの「対抗文化」論をめぐるウィリスの「野郎ども」とサックスの「ホットロッダー」ー、天理大学生涯教育研究 No.2, 1998, pp.31-44』
- 6) 筆者は、天野正子の「生活者」概念をもとに、「都市の政治的・経済的権力等の影響下にあり、それらの権力との間に一定の距離を置き、対抗意識を保持しながら山村において、日々『生活の質の変革』に取り組んでいるひとびと。」を「山村生活者」として位置づけている。

天野正子『「生活者」とはだれか』中公新書、1996、p.231